東パキスタン州チッタゴン丘陵地区の人口

堀 川 侃

東パキスタン州の南東隅に位置し、アラカン山系の西端部をしめるチッタゴン丘陵地区 (Chittagong Hill Tracts) は西から入って来たドラヴィダ族に属するベンガル人と東や北から来住したビルマ系、チベット系のモンゴロイド諸部族との交会する地域である。面積は 5,093 平方マイル、1961 年 1 月末の国勢調査結果による常住人口は 385,079 人である。このうちモンゴロイド諸部族はこの地方では hill men、ベンガル人は plains men とそれぞれ呼ばれ、両者の関係は東アジアから東南アジアの大陸部・島嶼部にわたって見られる平地民と山地民との間に認められるものと同性質のものである。しかしモンゴロイド諸部族の間にも複雑な関係が存在しているので、この地域の住民の生態を簡単に二元論的生態観で律することはできない。この小論の目的は、この地域の人口現象を人文地理学の立場から 1951 年 1 月末と 1961 年 1 月末の常住人口調査資料によって分析して、この地域に特有の性格をいくらかでも明らかにしようとする所にある。このために、まずこの人口現象に影響すると考えられる自然および社会・経済条件の概観が必要となる。

I-1 自然環境

地形上この地域は第三紀に形成された南北に並走する丘陵性の褶曲山脈とその間にはさまれた河谷の沖積平野とから構成されている。山地の地質は後期中生代・古第三紀の砂岩・泥岩・頁岩から成り、山容は丸味をおびている。山脈の高さは北部では約 500~700m、南部では約 1000m である。河谷平野の中は北部では、2~4km、南部では 1km 内外と狭くなる。河谷の形は横谷部を除いては緩傾斜である。土壌は粘土・シルト・砂と腐植土とが主成分であるが完全溶解土壌で黄色土に属している。気候は Köppen の新分類によると Am 気候に属し、暑湿・多雨の長い夏と、温和で寡雨の乾燥した冬とにわけられ、年降水量は北部で 80 インチ、南部で 120 インチをこえている。自然の植生

は熱帯モンスーン林で樹冠の高さは 20~30m ほどである。その林相は 19 世紀末に指定されたこの地域の面積の約 1/4 をしめる保安林によくわがわかれる。しかし過去にこの地域全域に焼畑耕作が行なわれたために保安林も正確には第 2 次林である。野生動物も各部門にわたって多種であるが大型哺乳類ではシカ・クマ・トラ・ヒョウ・ゾウなどが棲息する。以上の自然界を構造的にまとめて見ると今西 (1949) の言うところの熱帯降雨林生態系・亜熱帯林生態系——elephas 生態系に該当することになる。

I-2 経済・社会条件

自然条件が上述の通りなので稲作農業に適している。耕地としては丘陵部は焼畑に、河谷平野部は永久畑の犁耕農地となって、その主作物は稲である。副作物としてはワタ・カラシ・タバコ・トウガラシ・ダイコン・ナス・サトウキビ・ヒョウタン・瓜類などの野菜類、ココヤシ・マンゴー・ジャックフルーツ・バナナなどの果樹類を栽培している。自給農業で、わずかにワタを換金する。この地域の人口の大部分をしめるモンゴロイド諸部族のほとんど全部は農民で、焼畑・永久畑・水田耕作のいずれかを専業にすることも 2 つ以上を兼業することもある。家畜としては鶏・山羊・豚・牛・水牛・ミタン牛 (Gayal または Mithan と呼ぶ) などを飼っているが、部族によってその種類と数とが異なっている。部族民は自分の家・機・籠をつくり、布を織り衣服をつくるが金物・土器・陶器類はベンガル人から得ている。この地域の第 2 次および第 3 次産業のほとんどすべてはベンガル人に把握されている。行政権はパキスタン政府が握っているが実際上官僚の上層部はベンガル人によってしめられている。部族出身者が席をしめているのは官僚機構の中下層部である。行政系統は酋長を長とする部族の支配体系に近代的行政体系が代替した形となっている。チッタゴン丘陵地区は District の 1 つでその首都は Rangamati 市で、ここに District の最高

第1図 チッタゴン丘陵地区の行政区画と保安林

行政官である Deputy Commissioner が駐在している。District の下に3つの Subdivision — Rangamati, Ramgarh, Bandarban — があり、これらはもとの酋長の勢力範囲にあたる Circle にはほぼ対応する境域をもっている。各 Circle に酋長があつて法と秩序を維持し、その領域内の集税にあたり、民法上の権限を持っている。Subdivision はさらに Thana (警察管区) にわかれ、Thana は行政村に当たる Mauza にわかれる (第1図)。Mauza には政府によって

任命された headman がいて徴税にあたる。Mauza が行政上最小単位であるが、この境域には数個ないし 10 個ばかりの部落 (自然村) を含んでいてその長は部落民に選ばれた Karbari である。行政組織もこのように「部族地区」とよばれるこの地域に適した形をとっている。1947 年にインドと分裂独立した際に部族の分布地域内に国境を設定したこと、さらにこれに先だつてビルマと旧インドとの国境も同様な事情のもとに設定されたこと、自然的境界が不明瞭なこと、加えて部族の主な生業が焼畑農業である山地民が移動的性格を持つことなどの理由によって、政治的、軍事的に国境付近は不安定である。以上の如き経済・社会条件がこの地域の人口の流動的性格の原因をなすことになる。

II-1 人口密度

東パキスタン州の大部分はガンジスーブラーマプトラ河の三角州にあたり、気候・水利なども農業に適し (栽培期間も長い) ているため稠密な農業人口を支えている。1961 年の国勢調査によると州としては平方マイルにつき 922 人である。(これを 922 人/mi^2 と表現する。以下同じ)。District 別に見るとチッタゴン丘陵地区は東パキスタン州で最低の人口密度を持ち、その値は 76 人/mi^2 である。このように他の地域に比して格段に人口密度の低いのは初めに述べた自然的・人文的諸条件に大差があるからである。簡単に言えば、当地域が東パキスタン州随一の山地地域であり部族地域であることに起因している。この地域の 1961 年の国勢調査の Mauza 別人口の資料が得られなかったので、1951 年の国勢調査の資料によって人口密度の分布図を作成した (第2図)。第2図における人口密度の階級は D. E. Sopher (1963) の図と対照する意味で 30 人未満/mi^2 , $30 \text{ 人以上 } 70 \text{ 人未満/mi}^2$, $70 \text{ 人以上 } 115 \text{ 人未満/mi}^2$ および 115 人以上/mi^2 とした。同統計は各 Mauza とともに人口は 10 人単位、面積は 1 平方マイル単位で示してあつて、あまり正確でないと判断されるので、筆者の図においては人口密度階級を大きくした。また Sopher の図は同一の人口密度階級の連続的分布範囲を一括して示しているが、Mauza 別に示す方がよいので

第2図 チッタゴン丘陵地区の Mauza別人口密度

これに従った。元来この地域には **Mauza** (ベンガル語で、**Mouza** または **Mawza** とも言う) という行政単位は無く、約1世紀前に調査が行なわれた時に便宜上設定された調査区画であって、後に行政単位となったもので、その面積も小は1平方マイルより、大は30平方マイルをこえるものまであって面積の範囲が大きいからである。**Mauza** の総数は357である。しか

し地図資料の不完全さのためになおかなりの誤りがあるものと思われる。第2図と、主要部族の分布を示した第3図とを対照させると、中部・北部の **Chakma** 族の分布地域が人口密度が高く、西端部の **Marma** 族分布地域が中程度、南部の **Mro** 族の分布地域が低いという大勢を知り得る。これは部族の経済・文化水準の高さの差にもよるが、さらに根底には自然条件に影響されているものと考えられる。すなわち、中部・北部が南部よりも山脈の高さが低く、河谷平野の中も広い上に年降水量も南部ほど多すぎはしないからである。第2図に空白で表した部分は保安林の部分であるが、この中に約6,000人が分布している。さらに陸上に住居を持たず内水面上に屋根付の家舟の中に居住して内陸水運に従うベンガル人男子の出稼ぎ者が **Karnafuli** 水系に約1,000人、**Sangu** 水系に約330人、**Matamuhari** 水系に約460人分布している。

II-2 人種別・部族別人口

1951年の国勢調査による人口は287,688人である。このうち部族人口が261,538人、ベンガル人の人口が26,150人であるので部族人口が総人口の約91%をしめ、東パキスタン州のDistrict中最高の部族人口の比率をもっている。部族別人口を多いものから順に掲げると次の通りである。

① Chakma	124,762
② Marma (Mogh, Magh)	65,889
③ Tippera (Tipra, Tripuri, Tippera)	37,246
④ Mro (Morung, Mrong, Murung)	16,121
⑤ Tanchingya (Tanchan, Tontsongya)	8,313
⑥ Kuki	1,972
⑦ Kumi (Komi, Khami)	1,951
⑧ Lushai (Lushei)	1,369
⑨ Kheyang (Khyan, Khyang)	1,300
⑩ Riang	1,011
⑪ Bonjogi (Bon, Banjogi)	977
⑫ Panku (Pankho, Pankhua)	627

これらの部族を総称して **hill men** とよぶのは一括してベンガル人 (**plains men** とよばれる) に対しての場合であって、部族相互の間ではさらにそれが山頂・山腹に居住するか河谷平野に居住するかによってそれぞれ「山の人民」「河の人」と呼ばれる場合が多い。この呼称は他称の場合が多いが自称の場合もある。「水の

CHITTAGONG HILL TRACTS

第3図 チッタゴン丘陵地区主要部族の分布地域

人」という呼称もあるがこれは河谷平野の住民を指す。居住地による生態学的な呼称でそれぞれの生活様式を簡潔に表現している。上の表の番号で示すと、①②③⑤⑨⑩は河谷平野の住民であり、④⑥⑦⑧⑪⑫は山地の住民である。河谷住民・山地住民ともにその起原地は不明なものが多いが山地住民はビルマ領内のアラカン族の分派であると考えられており、河谷住民の多くは同じくビルマ領内のアラカン族に祖先を

もちながら多少ともベンガル人と混血しているものと考えられている。後者はかつてチッタゴン海岸平野で焼畑農業を行っていたものが西方からのベンガル人の来住によって圧迫されてチッタゴン丘陵地域内に流入して来たもので、その時期は18世紀の終り頃から19世紀のはじめにかけてであったと推定されている。形質的にも文化的にもかなりの差が山地住民と河谷住民との間に存在するので、Sopherの言うよう

に谷の住民と山の住民との間の関係は、谷の住民と plains men との関係より疎であるというのが一般である。山地住民と河谷住民との心理的な疎隔の最大の原因はともに焼畑農業を（専業・兼業とも）行なっているので焼畑の対象地について競争がおこることにあるとしてよいだろう。主要部族の分布の概略を Sopher と F.B. Labbéese¹⁾ とによって示したのが第3図である。Tippera 族および人口1万未満の部族の分布については Sopher の前掲論文の第2図を参照されたい。なお部族の1世帯当りの人口は1951年の国勢調査によると、Mauza 別に見て、最小は約4人、最大は約6人で算術平均値・最頻値ともにほぼ5人ではあるがこれは正確な数値とは認め難い。

西の海岸平野から当地域に來住しているベンガル人は plains men と呼ばれていることは前述の通りであるが、今なお大部分は一時的居住者である。部族に対しては農業を除くあらゆる活動の面で優位に立っていて1961年の国勢調査の時点では約85,000人に達しているものと推定され、近年其の來住者数は激増している。1951年と1961年との間に地域の西端部に近い Chandraghona に製紙工場が、Kaptai にダム式水力発電所がそれぞれ建設され、これに伴って多くのベンガル人が來住したことがその主要原因である。1961年の国勢調査によるとこの地域の総人口は385,079人であり、部族人口は約30万人であったと推定される。当地区では人種的にはモンゴロイド諸部族とベンガル人との間の異質性が最も著しいものである。

II-3 性別人口

1961年の国勢調査による性別人口を Thana 別に見ると、都市化・工業化によってベンガル人男子の單身來住者を多く含んでいる Thana において男子人口に対する女子人口の比率の低い事実が認められる。Chandraghona の製紙工場と Kaptai の水力発電所を含む Chandraghona Thana は男子1000に対し女子606となっている。チッタゴン丘陵地区の政庁所在地である Rangamati 市を含み、ここにベンガル人の官吏・商工業者・交通業者などをひきつけ

ているために Rangamati Thana ではこの比率が785となっている。当地域の北東隅の Thana である Bablakhali (Kasalong) Thana は1961年の Kaptai ダムによる水没移住者のために保安林の一部を開放した新開地に水没移住者農民とそれに伴って來住したベンガル人の商人・職人を収容したので開拓前線としての性別構成がうかがわれ、その比率は730となっている。第1図に示した Dighinala Thana の領域は1961年の国勢調査当時の Thana によると Dighinala と Bablakhali の両 Thana を合わせたものに当るから比較のために1961年のこの両 Thana を合算した計数で見るとこの比率は780となる。その他の Thana ではこの比率は802から963にわたっているが、地域全体としては815で、これは東パキスタン州全体の930に対して低い。この理由は上述の如くベンガル人の男子の單身來住者が多いことである。

II-4 宗教別人口

東南アジア各地域では宗教別人口は種々の意味で重要なものである。1961年の国勢調査の計数から算出すると当地域と当地域を除く東パキスタン州との宗教別人口の構成比率(%)は次の通りである。

	回教	印度教	仏教	キリス ト教	その他
チッタゴン丘陵 地区	11.8	12.4	71.6	2.6	1.6
上の地区を除く 東パキスタン州	80.4	18.4	0.2	0.3	0.1

当地域の部族の過半はアラカン族に属し、歴史的にもビルマ領内のアラカン族と関係が深いので形質的にも文化的にもビルマの特徴を維持しているので小乗仏教の信者が多い。Chakma, Marma, Tontsongya, Khyang 等の人口も多く河谷平野に住んでいる諸部族がこれに当る。キリスト教徒は北東部国境近くに住む山地民である Lushai 族や Panku 族に多い。今世紀の初頭以来のパプティスト派の宣教師の活躍に負うところが多い。「その他の宗教」とはほとんどアニミズムである。Bonzogi・Kumi・Mro などの山地民にこれが多い。このように仏教徒・キリスト教徒・「その他の宗教」の信者の比率が高いために、自ら回教徒と印度教徒との

1) Bandarban の Fatima Rani Church のカソリック教会の牧師。同氏に直接聞いたところによる。

第1表 ナッタゴン丘陵地区の宗教別人口構成比(%)
(Thana 別, 1961 年1月の国勢調査による)

Thana 名	回 教 徒	印 度 教 徒	その他の宗教信者*
Ramgar	5.8	48.3	45.9
Mahalchhari	3.0	27.2	69.9
Dighinala } **			
Bablahkali }	3.9	9.8	82.4
Rangamati	13.4	5.9	80.7
Chandraghona	32.6	5.7	61.7
Barkal	2.3	1.7	96.1
Langadu	7.0	1.3	91.6
Bandarban	6.8	2.3	91.0
Ruma	3.8	4.3	92.0
Lama	8.2	9.6	82.2
Naikhongchhari	49.3	0.4	50.3

* 仏教, キリスト教, 祇教その他の宗教の信者を含む

** 1951 年の国勢調査時にはこの 2 つの Thana は 1 つになっていてその名称は Dighinala であった

比率は低くなる。印度教徒の多いのは河谷住民である。Tippera 族・Riang 族などある。回教徒の分布は当地域に分布するベンガル人の分布とほぼ対応する。Thana 別に見ると, Naikhongchhari (回教徒比率 49.3 %) Chandraghona (32.6%), Rangamati (13.4%) が多く, 他では回教徒の比率は 2.3~8.2% である。宗教別人口の性別構成もベンガル人の比率の高い Thana では回教徒人口中男子の比率が異常に高くなっており, ベンガル人の少ないところでは男女の信者数に大差はない。

II-5 産業別人口, 労働人口

現在において東パキスタン州の就業人口中 80% 以上が農業に従っているものと見られるが, 当地域では農業人口の比率は A. L. Kisha (1963) によると約 90% という推定値である。筆者はこの地域の第1次産業人口の比率は部族人口では 95%, ベンガル人人口では 15% 程度, 第2・3次産業の比率はベンガル人人口の 85%, 部族人口の 5% 程度と考える。Kisha によると当地域の部族人口の約 50% が労働人口であって, 12 才以上の男女は全部農作業にしがたっているという。

II-6 都鄙別人口²⁾

当地域の都市人口は 1961 年の国勢調査では 22,804 人で, 農村人口は 362,275 人となっていて, 総人口に対する比率はそれぞれ 5.9% と 94.1% である。都市人口はこの地域の首都でこの地域唯一の市である Rangamati 市の 6,416 人と, Chandraghona 製紙工場と Kaptai の発電所関係の 16,388 人より成っていて, それぞれの都市人口の性比は Rangamati 市では男子 1,000 につき女子 441, 後者は男子 1,000 につき女子 249 である。この性比にうかがわれるように都市人口の大部分はベンガル人である。

II-7 人口増加率

1951 年の国勢調査人口と 1961 年のそれとによってこの 10 年間の人口変動を示したのが第 4 図である。Dighinala Thana (但し第 1 図に示す境域) においてこの間の人口増加が 50% をこえているのは 1960 年に Kaptai ダムによる水没移住によって Rangamati Subdivision から約 15,000 人が来住した社会的増加が大きな原因となっている。Chengri 河谷にも同じ理由による約 7,000 人の社会増があった。これらのほとんどは Chakma 族である。なお Kaptai ダムによる水没移住者約 90,000 人中

2) 1961 年1月の国勢調査における都市人口とは市部の人口と市の連担部に連接する市域外の連担部の人口, Provincial Director が都市地区と認めた連担部人口 5,000 人以上の集落の人口, Provincial Director が都市的性格・公共施設・道路・学校・非農業人口などの諸点から都市人口と認めた人口 5,000 人以下の集落の人口をいう。

第4図 チッタゴン丘陵地区の人口変動(Thana別)

Thana の境界をこえたものは約 25,000 人と推定されるが、その他の 65,000 人は水没地の丘陵頂上部や斜面に短距離の垂直移住を行なったので、ほとんどの場合同じ Mauza 内の移動であ

ったので Thana 別の人口の社会増加には影響しなかった。Rangamati, Langadu の両 Thana に人口の絶対減少の見られるのは、その水没による出移住者が多かったことによる。この期間における東パキスタン州の人口増加率は 21% であるが、District 別に見るとチッタゴン丘陵地区は増加率 34% で、ガンジス—ブラマプトラ三角州上にある Jessore Division とともに最高の増加率を示している。これは前述の Chandraghona の製紙工場、Kaptai 発電所をはじめ Rangamati 市の中小の工場建設に伴って多数来住したベンガル人人口による社会増加と、衛生状態の改善、医療の普及による部族の人口の自然増加とがそれぞれ著しかったためである。部族人口の増加率はこの 10 年間約 30%、ベンガル人の人口のそれは 270% におよんでいる。

II-8 人口移動

前述のダムによる水没に起因する主に部族農民の移住と、当地域外からのベンガル人の入移住とのほかに国境を越える人口移動がある。北部国境方面ではインドとの国境を Tripura 族が出入しているが、これはインドとパキスタンとの国境が元来の Tripura 族の分布地域内に設定されたことによっている。南部方面では近年 Marma 族や Mro 族がビルマ領に出て行きつつあるが、これは彼等が近い過去にビルマから当地域に来住したのでビルマのアラカン族に対する親近感が「引き」の力になり、パキスタン政府の最近における森林保護政策による焼畑耕作の圧迫や一般的なベンガル人の経済的圧迫³⁾が「押し」の力になっておこっている現象と考えられる。Labbeese によると第2次世界大戦の終了時から筆者が現地を訪ねた 1964 年3月頃までの間に Bandarban Subdivision 管内の Mro 族 10,000 人が国境をこえてビルマの Akyab 地区に流出して行ったという。焼畑の制限によって最も深刻な影響を被るのは焼畑専

3) Bandarban の Thana の官吏で Bohmong Chief の親戚である A.S. Prue 氏によると「Marma 族は約 200 年前に現在のビルマ領内から当地域に来住したが、第2次世界大戦までは Bandarban Mauza に 1,000 世帯も住んでいたのだが今 (1964 年3月) では 300 世帯に減ってしまった。近頃の他 Mauza に離散し、中には部落をあげてビルマに帰って行った例もある。彼等が故郷に帰りたいと思うのは当然ではないか。以前は酒も竹も鶏も安かったが、今では皆高くなって生活が苦しい。バザールで商売をやっているのも高級官吏も今ではベンガル人であるから……。」という状況で、異民族に支配されている少数民族の立場をよく表現している。

業の山地民であるが、その中で最も大きな人口を持つ Mro 族に上述のような移住への誘引力が特に強く働くことは当然であろう。

III 結 語

以上にチッタゴン丘陵地区の人口地理学的概観を試みた。筆者は 1964 年 2 月～3 月に大阪大学の総合学術調査隊に加わって当地域を訪ねた際に、部族の人人に接してダム水没による社会・経済的打撃の大きいことを知った。Chakma 族はその生業の資である肥沃な河谷平野の犁耕農地の大きな部分を失って移住をせまられたため、その不満は特に大きいようであった。大阪大学の第 2 次調査隊もドイツの調査隊もその後当地域に入ることを許されていないのは水没移住農民の間における社会的動揺が甚しいからだという情報がある。さらに今年から始められる Sangu 川のダム工事で Marma 族の水没移住が始まる筈である。

文 献

- Ahmad, K.S. (1964) : *Geography of Pakistan* Oxford Univ. Press, Pakistan Branch Karachi, Lahore, Dacca 216 pp.
- 今西錦司 (1949) : 生物社会の論理 毎日新聞社 256 頁
- Khisha, A.L. (1963) : *Shifting Cultivation in Chittagong Hill Tracts* (MS.) 112 pp.
- Office of the Census Commissioner, Ministry of Home Affairs, Karachi (1951) : 1951 Census of Pakistan Publication Bulletin No. 1 6 pp.
- (1951) : *Census Report Vol. 3* 482pp.
- (1951) : *Village List, Chittagong Hill Tracts*
- Sopher, D.E. (1963) : *Population Dislocation in the Chittagong Hills* Geogr. Rev. 53 337-362
- (1964) : *The Swidden/Wet Rice Transition Zone in the Chittagong Hills* A. A. G. 54 107-126

Population Geography in Chittagong Hill Tracts, East Pakistan

Tadashi HORIKAWA

The Chittagong Hill Tracts, the only mountain area of East Pakistan, were at first settled by the hill men, Mongoloid people, with the shifting cultivation. The immigration of the plains men, Bengali people, has brought the paddy cultivation, and the conflicts and acculturation between both peoples.

The writer studied the population geography of this area at the field survey in 1964 with following results.

1) The population density is higher than 70 per square mile in the settlements of Chakma, Marma and Tippera tribes with the paddy cultivation, occupying broader valley floors in northern and central parts, and is less than 70 per square mile in the settlements of Marma tribe with the paddy cultivation on mountain lands.

2) Hill men consists of many tribes, whose places of origin and degree of acculturation are various. But they are equally enthusiastic to take the Bengali culture.

3) The population of Bengali people shows male surplus, the high percentage of Islamism, and the inclination to the urban and the secondary and tertiary industries. The tribes are exclusively Buddhists and are living on the agriculture, and their sex ratio is normal.

4) The natural growth of population is generally high. The social growth is caused by the Bengali immigration to the westernmost region and the movement of hill men from the Kaptai reservoir area.